

## 第 10 回札幌文化芸術未来会議 議事概要

■日時：令和 4 年 2 月 7 日（月）15：00～

■開催方法：Zoom によるオンライン開催

■出席者

委員：伊藤 千織いとう ちおり／伊藤千織デザイン事務所 代表  
漆 崇博うるし たかひろ／一般社団法人 A I S プランニング 代表理事  
大友 恵理おおとも えり／社会福祉法人 ゆうゆう 芸術文化推進室 学芸員  
尾崎 要おざき かなめ／アクトコール株式会社 代表取締役  
カジタ シノブかじた し の ぶ／インタークロス・クリエイティブセンター ディレクター  
木野 哲也きの てつや／ウタウカンパニー株式会社 代表  
古家 昌伸こいえ まさのぶ／元北海道新聞記者  
小島 達子こじま たつこ／株式会社 tatt 代表取締役  
酒井 秀治さかい しゅうじ／株式会社 SS 計画 代表取締役  
関 鎮京みん じんきょう／北海道教育大学岩見沢校 准教授  
森嶋 拓もりしま ひろし／北海道コンテンポラリーダンス普及委員会 委員長  
山本 雄基やまもと ゆうき／画家

欠席：佐久間 泉真さくま もとまさ／市民委員  
八條 美奈子はちじょう みなこ／札幌フルーツ協会 副会長

事務局：札幌市市民文化局文化部長 有塚 広之

札幌市市民文化局文化部文化振興課長 木戸 拓史

札幌市市民文化局文化部文化振興課企画係長 高橋 由美子

札幌市市民文化局文化部文化振興課企画係 下山 竜平

■議事概要：

### 1 文化芸術創造活動支援事業 公募要領（たたき台）について

会議資料として配布した文化芸術創造活動支援事業に係る公募要領のたたき台（以下「たたき台」という。）の内容について意見交換や質疑応答を行った。

#### (1) 議論内容の反映について

- （関委員長）まず、確認だが、本日の議論の内容はどのように反映されていくのか、また、反映されるに当たって未来会議の委員に何らかの形でフィードバックがあるのか。

⇒(事務局) 本日の議論の内容は公募要領に反映していきたい。また、公募要領は、いずれかの段階で未来会議の委員からご意見をいただくとともに、どのような形になっているかもお知らせしたいと思う。

○(関委員長) 未来会議の委員に意見を聞く際に、全体の流れを把握できないことがないよう、一部ではなく全部を送ってもらえれば情報共有が正確にできると思うのでお願いしたい。

## (2) 各委員からの意見

### 【評価項目について】

○ たたき台では、三つの支援テーマに対し、問題解決、事業実施の確実性、事業内容の妥当性、事業の持続性というものが共通の評価項目となっている。支援テーマ別の評価項目もあり、支援内容、事業の発展性となっている。あまりにもざっくり過ぎて、これをどのように議論すればいいのか、すごく難しいと思う。現状では、選定委員は何を基準に選定すればいいのかにすごく困るのではないか。

○ 沖縄や横浜やセゾンなど、ほかの団体の事例を見て、評価ポイントについてはもう少し参考にしてもいいと思う。

○ 現状では、評価項目の評価事項の文言が支援テーマの説明内容ほとんど同じであり、あまり意味がないような気がする。

⇒(事務局) 公募対象となる事業をどうやって具体的に評価していったらいいのか、どういう評価項目とすればそれが評価できるのかは悩んでいるところであり、皆様のお知恵をお借りしたい。表現がざっくりし過ぎているというのは我々も同じ認識で、どうやったらうまく評価していけるだろうかと非常に悩んでいる。

○ 評価項目をこの会議で細かく検討すべきかどうかは、選考委員が、選定基準がある程度決まった状態で選考だけするのか、あるいは、このテーマに対してはこういう選定基準を設けた方がいいという検討の役割まで持つのか、それでかなり変わってくると思う。

⇒(事務局) おそらく、選定委員会の中でより細かく議論していただく必要はあると思う。ただ、全く何もない状態で選定委員に細かい基準をつくってもらうのは厳しいと思われるため、もう少しブレークダウンされた評価項目が必要と考えていたところ。

○ 評価項目のところでは、例えば、独創性、将来性、影響力、実現性、創造性、計画性、地域性など、そういう文言を並べるのはどうか。

○ 過去の会議でもほかの都市の事例などが挙げられていたので、それを並べた上でこれは要る、これは要らないとやっていくのが合理的なのではないか

⇒(事務局) 今のご意見は、例えば、横浜の事例であれば、先駆性、弾力性、持続性

など、セゾンの事例であれば、独創性、影響力、実現性などのワードがあったが、事務局でそれらをたたき台に落とし込み、皆さんに共有して、ご意見をいただくほうがよいということか。

- （関委員長）そのとおり。それでは、評価項目に関しては後日にご意見をいただくということで、ほかの議論に移りたいと思う。

### 【中間支援組織の名称について】

- これまでの議論では中間支援組織という言葉が使われてきたが、たたき台では「つなぎ手」という言葉になっており、自分はこちらの方がいいと思う。中間支援組織とは何かという説明は大変だと思っていたので、つなぎ手という言葉で表現されるならずっと通して使っているのではないか。ただ、事業の概要の説明にはつなぎ手という言葉が一切なく、アートマネジメントという言葉になっており、ここは統一感があっていい。一般的にアートマネジメントとは、いろいろな関係者をつなぐつなぎ手の役割なのだとすることをしっかりと説明し、その人たちが考えた事業を補助対象にするのだという意味合いがここに出ていないと、誰に対する事業なのかが分かりにくいと思う。もう一点、事業という言葉について、文化部の補助事業そのものと、つなぎ手が考える事業で重複している。同じだと分かりにくいと思うので、プロジェクトという言葉の方がいいと思う。
- 同じく、つなぎ手というのはすごく分かりやすいと思ったが、こういうことをつなぎ手と呼びますという定義があればいいと思う。
- つなぎ手は何と何をつなぐのか、それをもう少し明確に書くと組織に求める役割も明確になってくると思う。
- つなぎ手という言葉としては分かりやすい表現だと思うが、未来会議で議論してきた中間支援組織というのは、職能であり職域になっていくものだと思う。ここでいう「つなぎ手」というのは職業ではないので、それが果たして未来会議で話し合ってきた内容として適切なのかというのが個人的な意見。そうであれば、アートマネジメントということで、そこを中心とした事業設計をしてくださいということであるべきだと思う。
- つなぎ手的な機能もあるということではないか。つなぎ手を募集するとなると、言葉は優しいが、ヘビーな仕事となる。だから、未来会議で使ってきた中間支援組織というほうがしっくりくるし、募集要綱を見る市民と札幌市とで言葉を決めたいのではないか。ただ、つなぎ手的な機能もやってほしいということであり、つなぎ手ではないような気がする。
- もともとアートマネジメントという言葉が分かる人は、つなぎ手的なことを知っているのだから、要らない気がするが、これからつなぎ手の仕事を指したいな

ど、そういう領域にいない人にはこの言葉は有効だと思うので、迷うところ。

⇒（事務局）中間支援組織の定義がないので、非常に難しく、どうしようかということがあった。また、前回の会議の際、文化芸術基本計画の中にもアートマネジメントという表現があると話をしたが、それも理解が難しいというご意見があったことから、つないでいくという言葉だとイメージしやすいかと考え、つなぎ手という表現にしているところ。ただ、つなぎ手という表現だけでこれまで未来会議で議論されてきたものが全て包含されているのかということと悩ましいと思う。

○ 今回の募集に関しては、採択される本数にしても助成額にしても、100や200も応募が来るようなものではないと思う。そして、手を組むアーティストにより分かりやすく簡潔に説明する必要があるが、この募集要綱自体は中間支援組織のアートマネジャーとなる人が読み解き、プロジェクトを企画するという流れになっていくと思うので、分かりやすさや表現の簡潔さを求める必要があるのだろうかと考えている。

○ 未来会議で中間支援組織という言葉を使ったのは、民間組織でありながら公的な役割を担っていくということで中間支援組織という言葉を使ったのだと思う。単純につないでいくという役割ではなく、社会の中では、公的機関だけが公共性を担っていくのではなく、民間組織も公共性を担っていくのだ、市民と公的機関の間を支援していくという意味で中間支援組織という言葉はずっと使っていたような気がする。単純につなぎ手と表現したとき、その役割だけに重きが置かれてしまうのではないかと思う。社会におけるこの組織の位置づけや機能を考えると、やはり、中間支援組織という言葉がふさわしいと思う。

○ 前にアンケートを取ったとき、助成金を申請しない理由として、分かりにくい、難しそうということがあって踏み込めない人がたくさんいると分かったと思う。中間支援組織といったとき、何が難しさを感じさせるのか。中間支援組織になりませんかと言われても抵抗があるかもしれないが、やることは中間支援なので、くだらないかもしれないが、中間支援団体とかの方がいいと思った。

○ 中間支援組織という言葉を使うのであれば、公と民の間にあるという説明と、つなぎ手についてかみ砕いた説明を2段階にしてあげると分かりやすいと思う。

○ つなぎ手でも、中間支援団体でもいいと思う。その定義をきちんとして、通称として、この文章の中でつなぎ手と呼びますと書けばいい。呼び方はここで決めていいと思う。

○（関委員長）先ほど、組織という言葉が硬く感じるかもしれないので、中間支援団体ではどうかという意見があった。そちらの方が親しみはあると思う。ほかに意見がなければ、中間支援組織か中間支援団体かは文化部に検討してもらい、そ

これから、中間支援組織とはどういうものなのか、つないでいくつなぎ手の役割を担っていくということをきちんと書くということでしょうか。

### 【補助対象者について】

- （関委員長）たたき台では、札幌市内を活動拠点とする団体でなくても、その団体と連携することで申請することができるかとされている。これはこのままでいいのか、ご意見をいただきたい。個人的には、このような文言があってもいいと思う。必ずしも拠点とする団体だけにせず、道外で中間支援組織の役割をやっている団体と連携しながらスキルアップしていくということもあると思う。
- 実施する場所はどこでもいいと捉えられるが、プロジェクトなり事業をやる場所は札幌市ではなくてもいいということか。  
⇒（事務局）一部、市外に出ることはあり得るのかもしれないが、文化部としては主に札幌市内でいろいろなことがなされるというイメージでいた。ただ、今、改めてたたき台を見てみると、主な事業の実施場所は札幌市内でということが入っていないので、それは入れなければならないと思う。
- 国際的事業をやる場合もあると思う。例えば、国際マーケットに出品する、あるいは、国際の芸術祭に出す、道外の芸術祭に作品を出すということもあると思うが、どうか。  
⇒（事務局）例えば、ほかの自治体の芸術祭に参加するための作品づくりをするというようなことか。
- 作品をつくる場所はここでも、発表する場所は道外でもいい、海外でもいいという理解でよいかということ。ただ、レジデンスになると、それも当てはまらないような気がする。  
⇒（事務局）これは個人的なイメージであるが、当然、道外あるいは海外で発表するというのはありなのかもしれない。ただ、札幌市民に対しても成果を発表する、要は、支援が札幌市民に還元されるようになればいいと思うが、今すぐに正確なお答えはできない。
- この段階で制限する必要はあまりないのではないか。この事業におけるプロジェクトは、公益性のあるもの、要は、そもそも、自分のためではなく、周りの人のための事業でないと成立しない。札幌市民に何かしらの還元があるのであれば、正直、場所とかはどうでもよいと思うし、制限することでかえってスケールの小さいものばかりになってしまうこともあり得るので、道外の方も参入する余地はあってよいと思う。
- たたき台では、補助対象者の条件が包括的に規定されている。条件に該当しない者と組んでやる分にはいいということだが、共同ということになるのか。

⇒ その場合、代表となる申請者は本条件に該当する団体なので、札幌市内を活動拠点とする団体が代表者にならなければならないということだと思ふ。

○ 共同で申請をする場合で気になったのは外注費の規定。組んだところは内部になるのか、それとも委託先になるのか。また、危惧するところとして代表が形骸化する可能性があるということ。

○ この事業は、最終的にアーティストや芸術文化団体を支援することが目的だと思うが、先ほどの事務局の発言で市民に還元されなければいけないというところが引っかかった。プロジェクトの全てがアウトプット前提になるかというところが怪しい。アーティストの支援、イコール、アウトプットでもないと思っているので、そこは目的をきちんと整理していただきたい。必ずアーティストやアート団体以外の市民とされる人たちに何か還元されなければいけないのだとすれば、それは大前提に置かなければいけないと思う。個人的には、市民に還元されるものがあるなくてもいいのと思っているので、アーティストが創作活動する上で非常に有効な支援がされ、きちんとフィードバックされるのであれば、それはそれで有効なのだろうと思えるような支援内容になっている方がいいと思う。コロナの緊急支援みたいのところから派生してこの話になっているということも踏まえて、それが札幌市の芸術文化の発展に寄与するものとしてもらわないとまずいと思っている。もう一つは個人的なことだが、申請する団体が札幌市以外の団体ではまずいのか。例えば札幌市で行う支援事業を提案しているが、申請団体が市外の団体という場合はどうか。

⇒ (事務局) 例えば、活動基盤強化に関するものだと、アーティストが支援されることでよい作品が出来上がってくると間接的に市民に恩恵があるものもあるので、直ちに市民に還元がなければという意味ではない。それから、市外の方が主体となって手を挙げることについて、札幌のアーティストの実情をよくご存じの方々に手を挙げてもらおうと思っていたので、札幌市に活動の拠点がある方々と思っていたところ。ただ、札幌市外にいなながらも札幌市のことをよく分かっている方もいる可能性は確かにある。例えば、会社の事業所は市外であるが、主に活動している拠点が札幌なのだとということであれば問題ないと思う。

○ つまり、ハードとして何か拠点を持っているという考え方ではなく、事業を展開する場所が札幌市だと分かればいいということか。

⇒ (事務局) 仰るとおり。

○ 札幌市内というのが結構狭い感じがする。札幌近郊で活動している方々もたくさんいると思うが、札幌市内に限定するのか、あるいは、札幌市内及び札幌市近郊で活動する団体にも広げるのか、その辺は少し検討の余地があると思う。次に、

市外の人と手を組んだとき、代表となる申請者が必ず札幌市内の団体ではないといけないという縛りの意図が理解できないが、それについても伺いたい。

⇒（事務局）市内を活動の拠点とする団体というところを市内及び近郊にするというのは確かにありかと思う。次に、代表となる申請者が札幌の人でなければ駄目ということについて、申請の段階で、いろいろな人が手を挙げてきてくださって、審査の結果、札幌の方が選ばれるというのものもあるかもしれないし、今すぐには明確にお答えできない。

○ 共同で組んだ場合、必ず札幌の団体が主体ではないといけないのかについてはもう少し議論をしていただきたい。

○ ここはすごく大事な部分だと思う。事業に参加できるかどうかの最低ラインの条件なので、この時点で必要以上に札幌市にこだわる必要はないと思う。おかしなものがあれば選考で落とせばいい。例えば、年に2回、札幌で事業をやっている方もいると思うし、どうしたら札幌がもっとよくなっていくかを考えたとき、中の方だけでは駄目なケースもあり、外からの視点というのが大事な場面もあるので、この段階でそんなに制限する必要はないと思った。

○ 同じ考えで、例えば、地方の自治体の事業で、誰かが住民票を持っていなければならないという縛りがあるものもある。それをやってしまうとすごく小さくなるので、第1回目は、来たものを審査するぐらいのおおらかさでもいいかなと思う。最初から小さくしてしまうのではなく、第2回から縛ったらいいかというのが個人的な感想。

## 【その他】

○ たたき台で事業の実施について書いてあるが、この部分について事務局から説明をもらいたい。

⇒（事務局）たたき台で、「補助事業者は、採択内容やその後に調整した内容を踏まえて補助事業を実施します。」とあるが、これは、提案された事業について、内容を審査して採択するが、その段階では不透明な部分や内容を整理しないといけないものが出てくると思われるので、打合せをした上で、事業を開始していただくという意味合いがある。

○ 事務局というのは、文化部とSCARTSが担っていくという理解でよいか。

⇒（事務局）事業を構築していく過程で、SCARTSの役割も盛り込むべき、事務局にSCARTSを入れてはどうかという財政部局の助言を受け、事務局に入れたところ。

ここでは記載が抜けていたが、事務局には文化部とSCARTSのほか選考評価委員会も含めて考えている。

- 未来会議の議論では、まず、選考評価委員会で選考し、その人たちが採択した団体がきちんと事業を行っているかどうか、中間確認を行いながらコミュニケーションを取り、最終的に評価するという流れだったと思う。しかし、今の文言だと、事務局はP D C Aサイクルに基づいて助言・指導をするとある。文化部とS C A R T Sが採択された中間支援組織に対し助言・指導をすることか。  
⇒（事務局）事務局には選考評価委員会も含めて考えていたところ、記載が抜けていた。選考から最終的な評価の流れについてはご認識のとおり。
- ハンズオン支援について、ここにはS C A R T Sという組織名が明確に出ている。S C A R T Sが、随時、補助事業者に対してハンズオン支援を行っていくとなっているが、これはこのままの記載でよいか。  
⇒（事務局）現在はたたき台であるため、今後、S C A R T Sの役割も考えないといけないが、S C A R T Sは、この事業とは関係なく、普段から文化芸術活動に関して相談支援を行っているので、この記載についてはこのままでもいいかと個人的には思っているところ。
- 選定評価委員会が評価まで行うという説明があったが、評価の過程で中間支援組織とコミュニケーションを取ることはとても大事な流れだと思っている。しかし、このたたき台では、選考基準の作成と選定で終わっており、中間支援組織とつながっているようには見えない。S C A R T Sや文化部がこの流れを全部サポートしていくのかという疑問も出てくるかと思うが、この図をどのように読み解けばよいか。  
⇒（事務局）たたき台に掲載した図は、事業の全体像が見えるよう、仮に作成したもの。ご指摘のとおり、現在の図では事務局と採択した団体とのつながりが見えていない状況なので、この図をどのように修正すべきか、考えなければいけないと思う。
- 取りとめもないかもしれないが、応募する側に立ち、直感的に思ったことについてお話ししたい。まず、応募方法について、郵送と持参はやめてオンラインで申請できないものかと考えている。デジタル庁やほかの省庁でもオンラインで申請できるようになっている。次に、S C A R T Sについて、この会議に参加していないのに、この事業のことを理解されているのかという疑問がある。次に、中間支援団体について、たたき台には相談業務に関する記載もあり、札幌市と応募者をつなぐ事務局的な役割も求められていると思うが、どれくらいの対応力が求められるのか。小さな団体であれば電話番号を載せても応答できないなど、いろいろあると思うし、それが中間支援団体に求められる体制なのかが気になった。次に、補助金額について、これは総額500万円ということか。



⇒（事務局）予算全体では2000万円となっている。

○ 1件当たり上限500万円ということか。

⇒（事務局）ご認識のとおり。

○ 入場料、受講料、協賛金、寄附など、補助事業に伴う収入に関する記載がある。

これは事業実施に伴う収入は差し引くという意味だと思うが、個人的に、一つの考え方として、積極的な自己財源の獲得を奨励する方向もあると思っている。結局、それが事業の継続にもつながるし、覚悟とも言えるのではないか。収入の方法や中身によると思うし、いろいろな制度の考え方があるとは思いますが、自助努力の姿勢というか、将来性を見据えるというか、むしろ自分で何とか賄いなさい、お金を引っ張ってきなさいということを奨励する制度はありだと思う。また、中間支援団体をつなぎ手と呼び、支援者、スポンサーと仲のいい構図にしておきながら、スポンサーを獲得したら補助金を減らされるとなると、積極性が報われないところがあると思う。スポンサーや支援を集めることは相当高い能力だと思うので、ここは考えたらどうかと思う。次に、先ほど指摘があった図について、ここはA4判を丸ごと使い、別紙ぐらいの感じで細かく書くべきものではないかと思う。次に、補助対象経費の内訳について、時間外手当と役員報酬（代表者の人件費）は補助対象外とあるが、役員報酬と代表者の人件費は違うものだと思う。この事業の申請者には、小さな団体や個人事業主、共同申請も考えられる。小さい団体こそ、代表者がディレクターやプロデューサー、アーティストやコーディネーターをしている。上乘せするような役員報酬は駄目だと思うが、代表者の人件費はあるのが普通だと思う。また、賃金の下の報償費について、セミナー、シンポジウム等の講師謝金6,600円とあるが、この額を超える場合があるではないか。また、謝金と役務費と人件費が混同する人が多いと思うので、そういうところを優しく記載したらいいと思う。委託費について、補助対象経費総額の3割を超えた場合は自己負担とするとあるが、必要と認めた場合を除くという文言を入れておくとクリエイティブなことが期待できる。備考欄で3万円以上の支払いは見積りが必要とあるが、これは不要ではないか。同じく備考欄で10万円以上の支払いは2者以上の見積りが必要という記載について、金額を20万円ぐらいにしてはどうかと思う。次に、応募手続き等の概要の項目の中で、応募書類として納税証明書とあり、その中に市町村税とあって、「実行委員会は団体代表の」という記載があるが、中核団体という言い方に統一してはどうか。実行委員や共同申請などで合わさるものやこの申請のために組織することがあってもいいと考えており、そのときは必ず中核団体的なものを入れて、そこの財務諸表を送ってくださいとしたら優しいと思う。次に応募書類の提出方法について、郵送でとある

が、ここも頑張ってオンラインにしてはどうか。コロナで郵便局にも行きたくない人もいると思う。最後に、(7)で公募から補助金交付までの流れの記載があるが、この部分は分かりやすく図にしてはどうかと思う。

- 規制をかければかけるほど応募者は減ると思った方がいい。また、この事業は今回が1回目なので、いろいろなケースを知った方がいいと思う。民間からすると、役所が果たさなければいけないある種の公平性やそういったことで成り立っているルールみたいなものが発展的なものを阻害していると思うことが大いにある。例えば、お金の使い方にしても、先ほど意見があったように、見積もりを取らなければいけないということについて、民間にお金を下ろし、その裁量でいい成果を出してもらおうとするのであれば、そこに規制をかける必要はないと思う。大らかな仕組みにしないと、応募のケースがすごく限られると思うので、ここは注意した方がいい。この事業を継続させ、本当に有効なものにしようと思うのであれば、ある種、事業者の裁量を認める内容になっていないとまずいのではないかと思う。相見積りを取る、上限金額を設けるということについては、根拠なんてほとんどなく、前例に従っているだけ。しかし、それでは呼べない人材がいるとか、そこでは収まらないものが本来の意味での発展をもたらす可能性を十分に持っているため、なるべく制限を解除してもらえ方向で整理してもらった方がいいと思う。
- 先ほど意見があったように、報償費の上限が6,600円では難しかったり、相見積りは、振付家や演出家にしても、この人に頼みたいと考えているのに相見積りを取るとするのは、場面によってはすごくナンセンスなものになる場合がある。また、「希望する補助事業者は、概算払請求（交付決定額の6割以内）が可能です。」という記載について、ここも内容によっては10割にすればすごくいいのではないかと思う。経済系のものづくり補助金や事業再構築などは自分の会社のための補助金だと思うが、今回の事業は誰かのためのものであるにもかかわらず、この概算払いでは事業者がお金を立て替えなければいけない。また、黒字になったら助成金を減らします、その事業をやる人はお金を得てはいけませんなど、時間やお金、やる気を搾取されていると感じることがあるので、なるべくそういうものはなくしてほしいと思う。
- 既に他の委員から意見があったが、「補助事業の実施に伴う収入（入場料、受講料、協賛金、寄附）がある場合、補助対象経費から収入額（税抜）を控除した額と、上表の上限金額のいずれか低い額を補助金額（上限）とします。」という記載について、500万円から自分で得た収入をマイナスにするというのはナンセンスだと思う。チケット収入500万円、スポンサー収入500万円、札幌市の5

00万円で1,500万円のことを行いなさいというようなことを推奨するぐらいの方がいいのではないか。概算払いに関して、それなりのファンドレイズを行える団体こそ、将来的には札幌市の中間支援組織として多くのアーティストのために働いていける組織になっていけるのではないかと考えている。

- 基本的に概算払い6割でもいいと思うが、例えば、コロナの緊急支援など、その内容によっては10割も考えるなど、この状況なら仕方ないということがあってもいいのではないか。
- この事業では、公的機関ができないことを中間支援組織がやろうとしており、全員が全員、運営が成り立っているわけではないと思う。マーケットが成り立っているところでやるのであれば問題ないが、マーケットの手が届かないところを中間支援組織がやろうとしているのであり、概算払いはあってもいいと思う。
- 他都市の例をあげると、例えば大阪の事業は言葉の使い方がすごく軟らかくて分かりやすい。窓口の名前や事業もそうだが、一目で分かるようなキャッチフレーズを使っている。しかし、このたたき台を見ると、役所の人間が書いたような文章になっているので、キャッチフレーズ的な言葉を開発してはどうかという気がする。事業名に愛称をつけるとか、そうしないと顔つきが硬くなるというか、取っつきにくいという感じがする。
- SCARTSのことも含め、どういう形で、どういうプロセスでハンズオン支援をしていくか、どの段階でやっていくのかといった整理は必要だと思う。文章だけだと分かりづらいので、応募の流れが分かるフロー図も必要だと思う。申請する側から見たときに、誰がどう寄り添っていく事業なのかがこのたたき台では分からないので、この辺りをどう整理するのかは考える必要がある。
- たたき台を見て一番気になったのは、突然、SCARTSの名前が入ってきたところ。今回の未来会議の企画は独立性を保った新しいことをするという筋だったはずなのに、最後の最後で一回も会議に出ていないSCARTSの名前が出てきている。SCARTSを入れなければならないにしても、もっと納得できる説明がほしい。また、たたき台を見ると、この事業が既存事業と変わらない内容になるのではないかという心配がある。今までと違うことをやるために本当にこれでいいのかというところをもう少し考えたい。自分は美術の世界しか分からないが、この事業に応募してくる団体の顔が三つか四つほど想像できており、ほかの団体が彼らよりもいいプランを持ってきて採択される可能性はかなり低いと思っている。既存の団体がお金を取って、そこに事務局とSCARTSが絡んできて、何が変わるのか。そうではない可能性を考えながらやってきたはずなのに、これでいいのかと思っている。

- 今の意見は本当にそのとおりだと思う。今、未来会議で未来のことをつくって  
いこうとしているが、このままで行くと、悪いという意味ではないが、ある程度  
知っている人たちでやることになるかと思う。事業の出だしとしては必要だし、  
むしろ、その方が蓄積されていくものを共有したりしやすいということも確かに  
あるが、未来会議は市民の声を聞くというよりは、それを政策にしていこうとい  
うものはずなので、どうせならわくわくするものを創りたいというところがあ  
る。書類も、デザイナーを入れて、すごく分かりやすくポップにすべきだと思う。  
先ほど概算払いに関する意見があったが、台湾や韓国のように最初から全額を渡  
し、とにかく思い切り前に進めてくださいと行政が言うと応募者がどんと増える  
可能性がある。それぐらい思い切って、明らかに空気が違うようなクリエイティ  
ビティーを何か見せられないかと思った。また、事業報告が14日以内なのは厳  
しいので、もう少し長くした方がいいと思う。
  - この募集要項のたたき台を見たとき、急にSCARTSの名前が出てきたので、  
ほかの委員の方々もびっくりしたと思うが、SCARTSが関わると分かった時  
点で事務局が未来会議に情報を流し、意見交換をすることが望ましかったのでは  
ないかと思う。1年半をかけて文化部と未来会議が対等にコミュニケーションを  
取りながら一つの政策に向けて一緒に頑張ってきて信頼関係ができたというこ  
とがあるが、今回、たたき台がここまでできた段階で、急にこうなりましたと言わ  
れてしまうと、今まで築いてきた信頼関係は何だったのかとなる。開かれている  
行政を期待し、未来会議の面々で率直な意見を出しながらやってきたのに、急に  
非常にクローズなやり方になったので、未来会議の委員にも少し戸惑いがあった  
のではないかと思う。これから募集要綱をつくるに当たっては、信頼関係を維持  
できるようにするためにも細かいやり取りがあったほうが一つの政策に向けて一  
緒につくっていくのだという感じが出ると思うので、お願いしたい。
  - 今後のスケジュールを確認した方がいいと思う。3月の後半に公募をするぐら  
いの勢いで、庁内でもオーソライズされていくと思うが、それにどう間に合わせ  
るか。あと1週間から2週間ぐらいでまとめなければいけないというスケジュー  
ル感だとすれば、内部事情も含め、この場でどうまとめていくのか、皆さんでい  
いものにしたいというようなメッセージをはじめ、いつまでにどの部分を議論し  
ようといったことを話し合いたい。
- ⇒ (事務局) 規制が厳しいと参入しづらいなど、確かにもっともだなというご意見  
が多々あった。また、SCARTSが最後の段階で急に入ってきたことについて  
は全くそのとおりだが、内部的にはいろいろな苦労があった。ただ、そう分かっ  
た段階で委員の皆さんに情報提供なりご相談なりをするべきであったというのは

全くそのとおりだと思う。今回頂いたご意見を反映させたものを至急作っていく。たくさんのご指摘があったので、今日の議事を読み返した上で、反映できるものから、随時、反映し、情報共有させていただきたい。イメージとしては説明会を3月末にやろうと思っており、そこがオープンになるタイミングなので、それまでに大急ぎでいろいろと整理したい。先ほどのご意見で、わくわく感がやや欠けているのではないかというものがあったが、その点についてはすごく残念に思う。そうならないよう、最後の最後までしっかりとやって、いいものができたと委員の皆さんに言っていただけるように頑張りたい。

- 説明会というのは、誰が説明をし、どういう形式でやるのか、それは行政主導なのか。
- ⇒ (事務局) 公募をするのは行政なので、我々が説明しなければならないとは思っているが、ご意見があればいただきたい。
- 行政側の言葉と現場の言葉には違うところがあるので、翻訳しなければいけないと思う。特に、今回はすごく新しい事業であり、これを行政の言葉で説明をしても、先ほど意見があったように、わくわく感がかき立てられるかということ、そこも疑問がある。例えば、未来会議でここまで作ってきたということもあるので、未来会議の委員が何らかの形で説明会の手伝いをしながら、アーティストや芸術団体に広げていく役割を担えるのではないかと思う。こういった政策は、行政だけでつくるものではなく、未来会議をはじめ、芸術家や芸術団体と一緒に作り上げていくことに意味があると思う。
- わくわく感が伝わるかどうかというのは、説明会に参加する手前の段階の話だと思う。説明会に来る人というのは、興味を持っていて、何とか取ってやろうと思って来る人かもしれないと考えたら、ポップな表現にする、宣伝に力を入れるなど、そういうところが重要だと思う。また、新しいものを予感させるためには、内容的にすごく自由度が高い、現場に裁量がある、アーティストにダイレクトな支援がきちんとされるなど、今までになかった手法がトピックスとして分かりやすく明示されているべきだと思う。説明会は、むしろ、行政の人が説明した方が抜けがない可能性もあるのではないかという気もする。説明会をキャッチーなものにする必要はあまりないと思う。
- 先ほどから出ているわくわく感に関する意見は本当にそうだと思っていて、今からでも、例えば、デザインをよくするとか、コピーライターを入れるとか、ペラ2枚でもいいからいい表紙をつけるだけでわくわく感を2割はアップできると思う。未来会議で考えてきたことは今までにない事業だと思うので、ぜひプロを入れるなりしてほしい。たたき台がよくないという話ではないが、その内容をもっ

と伝えられれば、多くの応募者が来ると思う。なお、説明会は行政側できちんと伝えてもらえればいいと思うが、ここはプロを入れてやってもらいたいという気がしている。

- 反対の意見になってしまうが、今ある2,000万円の予算額をそういったことに使うことで1,900万円になったりする。そうなると、中間支援組織に渡るお金も幾ばくか減り、ひいてはアーティストに行くお金も減ってしまう。この事業は100人も200人も応募者を集める必要があるものではないので、きちんとした内容が簡素な文面で表現されていれば、かけられる費用はアーティストに使ってもらいたいと思う。予算をどう使うかにはいろいろと議論があり、確かに、見やすく、きれいなものになる方がいいとは思いますが、そのお金の使い方が正しいかどうかについては何とも言えないところ。
- この事業は、中間支援組織からアーティストや芸術団体に対しいろいろなプロジェクトを展開していくものなので、中間支援組織として応募する団体だけではなく、札幌で活動しているアーティストやほかの芸術団体がこの事業を理解していくことがとても大事だと思う。どういう思いがあってこの事業や政策がつけられていて、今後、アーティストや芸術団体にどういうプロジェクトが展開されていくのか、そういったわくわく感が一緒につくられていくといいと思った。

## 2 未来会議に関する各委員の感想等について

未来会議に関する各委員の感想等の取りまとめ方法について、関委員長から下記のとおり提案があった。

- （関委員長）1年半ぐらい未来会議に関わってきて、こういった会議に対しての感想や課題、あるいは、今後の在り方について各委員も思いがあるのではないかと思う。口頭だと伝えきれないと思うので、文字で頂けると有難い。それを、未来会議のメッセージという形でホームページに掲載できればと思う。委員のメッセージが集まったら文化部で体裁を整えていただき、最終的に自分と酒井副委員長でチェックをした上でまた戻すという流れでもよいか。
- ⇒（事務局）皆さんから出していただいたものを見て、最後、どういう形でまとめをつくっていくか、ご相談させてもらえればと思う。